

報告 ソフィア哲学カフェ ～オンライン哲学カフェ元年～

寺田俊郎

昨年の春先に新型コロナウイルス感染症が流行し始め、四月には緊急事態宣言が出て、われわれの生活は大きく変わることを余儀なくされた。この事態は、哲学対話という対面で実施するところにこそ本領があると思われる活動にとっては、致命的ともいえる禍である。しばらくの間は開催を見合わせるほかなかった。

そのうち、大学では春学期の授業開始が延期され、五月末より原則としてオンラインで授業が実施されることとなった。初めて経験するオンライン授業の準備に戸惑いながらも、必要に迫られて四苦八苦しなから経験を積むうち、哲学対話もオンラインで開けるのではないかとの感触を得た。そこで、街で行う哲学カフェも、キャンパスで行う哲学カフェも、オンラインで試してみた。

恐る恐る始めたものの、本年度を終えての感想を一言で言えば、思ったよりも哲学対話らしいことができる、ということになる。もちろん、対面で行う哲学対話のようにはいかないこともある。だが、対面の哲学対話にはない利点も見つかった。そんなことも含めて、本年度の「ソフィア哲学カフェ」および「シネマ哲学カフェ」の報告を記したい。

開催日程とテーマは以下のとおりである。

- 5月22日 ソフィア哲学カフェ「弱さ」
- 6月22日 ソフィア哲学カフェ「忖度」
- 11月25日 ソフィア哲学カフェ「事実」
- 12月21日 ソフィア哲学カフェ「責任」
- 1月28日 シネマ哲学カフェ『難民キャンプで暮らしてみたら』

進行役は寺田と客員所員の堀越耀介が分担して務めた。

対話のテーマとしては社会状況・世相を映したものが並んでいる。新型ウイルスの脅威の前に「弱い」われわれ人間、政権に蔓延り政治を歪める「忖度」と政治家が口にしながら果たさない「責任」、虚実の区別がつかない「ポスト・トゥルース」の時代で揺らぐ「事実」…。しかし、哲学対話は現代の状況そのものを語りあうことに主眼があるわけではない。それぞれの言葉をめぐって言葉を交わしあう中で、批判的、多角的に考え、それぞれの思考を掘り下げ、耕し、各人の意見をより深く豊かにしていくところに哲学カフェの醍醐味がある。その醍醐味は、オンラインでも味わえることがわかった。

もちろん、オンラインでは、丁々発止のテンポのよいやりとりは難しいし、互いの表情や仕草が感じられにくいので誤解の不安もある。だが、これは裏返せば、話し手の発言を聞き届けてから発言することを促し、対話の速度が速くなりすぎることを防ぐこと、対面で感じられる人びとの視線の圧力を感じずに話すことができることでもある。また、みんなマイクを通じて話すので、声が小さくて聞こえにくいということもない。そして、なにより、遠方の人でも参加できる。実際、毎回日本各地からの参加者がいて、参加者数は倍増した。海外からの参加者もいた。

このような利点を考えると、新型コロナウイルス禍が去ったからといって、オンライン哲学対話がなくなるとは思われない。それが対面での哲学対話の代替になることはなさそうだが、それはそれで一つの哲学対話の形態として存続していきたくらうし、存続するのが望ましいと思われる。

一つ、大失敗の経験もした。「責任」の回でのこと。対話の終盤、三人の参加者の発言をうまくつなぎ合わせると、みんなで検討するに値する仮説が得られそうだと見通しの立つ場面があった。時間が迫っていたので、急いでその仮説をつくろうとしたところ、それが議論を強引に誘導しようとしたと受け取られてしまい、数人の参加者が反発してしまった。議論を誘導すること、あるいは議論を誘導していると参加者に感じさせることは、進行役としてもっともやってはいけないことだと日頃考えているので、すぐに謝ったが、そこで時間切れになり、何とも後味の悪い幕切れになってしまった。これは、オンライン開催のため参加者の表情や対話の雰囲気を感じられにくいことから起こったと思われる。進行役の修業はまだまだ続く。

さて、シネマ哲学カフェでも収穫があった。大学で上映会ができないので、著作権その他の条件をクリアできる開催方式を考える必要があったが、幸いオンラインで映像作品の上映会をサポートしている会社が見つかったのである。数多くの作品を提供しており、どれも興味深くてどれにするか迷ったが、『難民キャンプで暮らしてみたら』を選択した。二人のアメリカ人青年がヨルダンにあるシリア難民キャンプで一か月生活する様子を撮影したドキュメンタリー作品である。

シネマ哲学カフェで起こりがちなことは、すぐれた作品であればあるだけ作品の迫力に押され、また、鑑賞時間が長く対話時間が短いため、対話が物足りないものになりがちだということだ。今回も例外ではなかった。作品はとても豊富な内容をもつ魅力的な作品であり、語るべきことが多くあるのに、対話のための時間は限られていた。だが、それでも、互いの言葉に耳を傾けながら各自が考えを深め豊かにしていくことはある程度できた。ぼくが主に考えたのは人間の尊厳。日常的なごく些細なことに人間の尊厳が宿っており、当たり前の日常が奪われると人間の尊厳も傷つき、重く意識されるようになる、ということだ。

これからも、日ごろ立ちどまって考えないことを、ゆっくり、じっくり、対話を通じて共に考える機会を提供していきたい。

寺田 俊郎 (てらだ としろう)
グローバル・コンサーン研究所 所員／文学部哲学科 教員